

茅風



— Breeze from the field of thatch-grass —

2024年7月12日
森林塾青水
事務局便り
茅風通信 72号



天候に恵まれた野焼き(4月28日) 撮影:清水英毅

目次

- 3月～6月の活動報告(事務局).....1
- 第23回定期総会開催報告.....2
 - ◆ 新年度新規・重点項目
 - ◆ 2024年度の役員構成
 - ◆ 2024度の主な活動計画・日程
- セミナー報告
「上ノ原にて考えたこと」(講師 小幡和男)
- 2023定例活動⑧.....4
「上ノ原 雪原トレッキングと自然体験」
 - ◆ 開催報告(草野 洋・稲 貴夫)
 - ◆ 感想文(幸田 啓子・郡司典子)
- 2024定例活動①.....6
「茅場の野焼き」
 - ◆ 開催報告
(草野 洋・尾島キヨ子・藤岡 和子・稲 貴夫)
- 麗澤中学校樹木観察会.....10
 - ◆ 実施報告(西村 大志・藤岡 和子)
- 藤原だより(北山 郁人).....11
「みなかみ町ネイチャーポジティブ宣言」
- こもんずの広場(笹岡 達男).....12
編集後記(敬称略)

2024.3～2024.6の活動報告

- 3月9日、10日 「上ノ原雪原トレッキングと自然体験」に15名参加。
- 3月10日 上記プログラム修了後、月夜野の「さなざわテラス」で忘年度会及び拡大幹事会を開催。幹事及び顧問他、計10名が参加。
- 3月17日 幹事会開催。総会運営、野焼きの実施、20周年行事等について打合せ。
- 4月6日イオン環境財団の助成先対象の説明会(オンライン)に、稲、西村、藤岡(貴)が参加
- 4月13日 総会前に幹事会開催。総会の日程や野焼きの運営について最終確認。
- 4月13日 森林塾青水2024年度総会及びセミナーを開催。会員22名、委任状21名の計43名が出席し、新年度の活動計画及び役員体制等を決定する。総会セミナーでは、小幡和男さんが「上ノ原にて感じたこと」と題して講演。終了後、懇親会を開催。
- 4月27日、28日 「上ノ原の野焼き」に一日目33名、二日目40名参加。藤岡(和)、稲、松澤の幹事三名が前日入りし、予め防火帯の一部を刈払い。一日目は防火帯整備の外、野焼き講習会を実施。二日目は天候にも恵まれ、久しぶりの

本格的な野焼きを実施した。また、一日目には、(公財)社会貢献支援財団の黒川さんが青水の活動を取材。

- 5月18日 麗澤中学校「ゆめプロジェクト」樹木観察会の下見に西村幹事以下4名参加。
- 5月19日 幹事会開催。麗澤中学校樹木観察会、6月のプログラムなどについて打合せ。
- 5月25日 麗澤中学校「ゆめプロジェクト」樹木観察会実施。青水よりインストラクターとして13名が参加し、5クラス160名の生徒に五感を使った樹木観察をガイドする。
- 6月1日、2日 上ノ原の植物調査実施。小幡和男さん、筑波大学の西平さん、飛詰さん及び西村、稲が参加。
- 6月9日 幹事会開催。
- 6月15日、16日 「森林整備でリトリート」に20名参加。(写真・下 詳細は次号で紹介します。)



■第23回「定期総会」を開催
2024年度事業計画を承認、茅場保全の
技術向上と更なる活用へ 報告 稲 貴夫

森林塾青水が上ノ原で活動を始めてより、20周年を迎えましたが、去る4月13日には、第23回定期総会を渋谷区の地球環境パートナーシップセミナースペースで開催しました。その概要を報告します。

総会には会員22名が参集し、委任状21名と併せて計43名で総会は成立。北山塾長の挨拶の後、笹岡顧問が議長に選出され、議事が進められました。

前年度の事業・収支報告、2024年度事業計画・予算案、役員選任、会則改正の提出議案はすべて承認されましたが、要点のみ以下に列記します。

まず、前年度活動の総括として、課題点及び可能性の両面から挙げられたのが、次の8点です。

- ① 茅刈り手順の徹底-茅以外を除き束を揃える-
- ② 希少種の保全活用を20周年の課題とする
- ③ 植生調査は研究者と連携し計画的に取り組む
- ④ (公財)社会貢献支援財団表彰一次審査を通過
- ⑤ 地元の茅刈り衆を増やすための対応を検討
- ⑥ 十年前開削した増井試験地の除伐を継続実施
- ⑦ 試行している茅穂の採集を軌道に乗せてゆく
- ⑧ 軌道に乗ってきた茅刈合宿を充実化してゆく

これを受けての2024年度の事業は、別掲の年間行事予定表の通りですが、その中で特に、「植生調査」「野焼きの確実実施」「茅刈り技術の向上」等を重点的に取り組むこととなりました。

また、長年に亘り幹事を務められた岡田伊佐子さんが退任され、稲千賀子、藤岡貴司の二人が新幹事に、藤岡和子幹事が副塾長に就任するとともに、事務局長が草野幹事から稲幹事に交替する役員選任が承認されました。これに伴い、新しい当番職として副塾長制の設置も含めた会則改正案が承認され、議事は全て終了しました。



続いて幹事を退任される岡田さん他、新任幹事が挨拶した後、朱宮会員から「自然共生サイト」についての報告があり、総会は終了しました。

新年度基本方針及び事業計画等は以下の通り

基本方針

多様な人々が飲水思源の志でつながり、生き物たちでにぎわう上ノ原の「入会の森(茅場・ミズナラ林)」を持続的に保全・利用していく。

	ベースの活動	新規取組み・重点取組み
茅場保全と活用	野焼き 茅刈り・運びだし 茅の販売	毎年確実に野焼きが出来る体制づくり 野焼きの効果の検証実験 茅刈りの担い手の育成と茅刈り技術の向上 茅の商品としての品質向上、安定的な販路開拓 茅の種採取、販売
ミズナラ林保全と活用	二次林の若返り伐採と資源の活用	自伐型林業との協働と利用促進 間伐の推進、薪、木炭、木製品などの製品化 リトリートプログラム活用
調査研究	生き物調査	専門家の指導を受けての植生調査 センサーカメラによる生き物調査(赤谷プロジェクトとの連携)
環境教育	藤原小学校との協働 学校団体等の受け入れ	希少植物の栽培などを通じた環境教育 麗澤中学校、その他武蔵中学校など
社会貢献・地域貢献	環境資源の発掘、掌握、アピール	草原の里100選、重要里地里山500、モニタリングサイト1000、昆虫等保護条例指定地、SDGsを意識した活動 NAX-Jと連携した(OECM、自然共生サイト)への登録
活動基盤維持強化	担い手の若返り・強化 担い手層の拡充 関係団体との連携	執行部の若返り 茅刈新規参入者の促進、自伐型林業の研修参加者への働きかけ(前年度から継続) 大学など教育機関との連携、働きかけ 茅茸き文化協会のチャンネル活用
普及啓発	広報、PR活動	ホームページ、SNS等による情報発信 町報、回覧板、県広報等によるPR 記帳台の活用による、山菜取りなど茅場の利用状況調査

◆2024年度の主な活動計画・日程について◆

総会後の変更、追加を反映しています。参加申込みの際は必ず事前にホームページ等でご確認下さい。

月	主な活動予定 ①～⑧は定例活動
4	総会・セミナー/13(土) ① 野焼き・山の口開け/27(土)・29(日)
5	麗澤中学校樹木観察会/25(土)
6	② 森林整備(若返り伐採)とリトリート/15(土)・16(日)
7	③ 茅場の防火帯整備/13(土)・14(日) 「荻ノ島茅葺きの里」他訪問(現地学習会)/14(日)・15(月祝日)
8	④ 植生調査・森林散策/17(土)・18(日)
9	「日光茅ポッチの会」訪問/21(土)・22(日) ⑤ ミズナラ林整備と茅の穂採取/28(土)・29(日)
10	地元による茅の穂採取 麗澤中学校奥利根水源の森林フィールドワーク/下旬 ⑥ 茅刈り/26(土)・27(日) 茅刈り合宿・地元による茅刈り(10 下旬～11月上旬)
11	⑦ 茅出し、山の口終い/23(土)・24(日)
12	活動予定なし
1	流域連携活動、小貝川・菅生沼の野焼き/25(土)・26(日)
2	活動予定なし
3	⑧ 冬の自然観察と雪原トレッキング/8(土)・9(日)
通年事業(行事の中で随時実施予定の活動等) ・植生調査 ・希少種の育成、生育状況モニタリング ・NPO 奥利根水源地域ネットワーク側面支援 ・自伐林業との相互交流 ・茅の販路開拓 ・全国草原再生ネットワーク等 ・連携団体への上ノ原来訪・利用呼びかけ	

新任役員、幹事からの一口コメント

副塾長 藤岡和子 飲水思源という広がりのある考え方を地元や町の々と協力しながら、伝えていけたらと思います。

コロナのパンデミックなどで、地域との関係が少し希薄になってきましたが、地元につながる技術的伝承をこれからも楽しみながら学び、次に繋いでゆきたいです。

幹事 藤岡貴嗣 茅の活用がうまく回り始めているように感じています。これから、それがもっと良い方向にゆくように、小さな地球などいろんな団体とのつながりも大切にしながら、広がりをもった活動とすることを目指してゆきたいと思っています。

◆今年度役員構成◆

～塾長・事務局長・幹事・顧問・相談役等紹介します～

※下線は新任 PGM:プログラム

塾長 北山 郁人

全般統轄

みなかみ事務所長(地元・みなかみ町役場ならびに支援企業との連携、資材等管理)

副塾長 藤岡 和子

塾長補佐、必要に応じて代行

全般にわたる企画 児童青少年の教育 PGM

事務局長 稲 貴夫

全般にわたる管理、全般統轄補佐

下流部会統轄・東京楽習会・流域連携、総会/セミナー、「茅風」編集長

幹事

稲 千賀子

麗澤中補佐「樹木観察会/FW」、下流圏 PGM 補佐、総会/セミナー補佐

尾島キヨ子

麗澤中補佐「樹木観察会/FW」、下流圏 PGM 補佐総会/セミナー補佐、

草野 洋

事務局長補佐

西村 大志

学術面サポート、学識者・研究者との連携、助成事業、広域連携補佐(草原再生ネット、草原サミット)、麗澤中(統括、窓口) WEB 管理補佐

藤岡 貴司

事務局長補佐(予算管理、会員名簿管理、総会ほか)

松澤 英喜

会計・出納

柳沼 翔子

事務局補佐、WEB 管理補佐

吉野 一幸

現地活動塾長補佐、プログラム企画開発、広報、WEB 管理

藤岡 貴司(兼務)

地元代表、地元の活動参加促進、地元情報発信

会計監査

顧問

安楽勝彦

川端英雄

笹岡達男

滑志田隆

清水英毅

相談役

雲越 萬枝

林 親男

みなかみ町担当窓口 環境課

幹事 稲千賀子

コモンズである上ノ原が、いろいろな人が森や草原の楽しさを共有できる場であるよう、つとめて行きたいです。私があるためににできることは余りないですが、とにかく私自身が楽しむことで、それを周りに伝えてゆければと考えています。

事務局長 稲貴夫

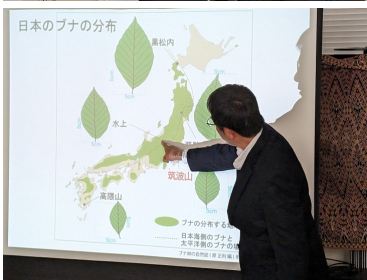
上ノ原で活動を始めてから20年。私が一会員として初めて上ノ原に来てからは、まだ20年は経っていませんが、ものすごく昔のように感じています。次の20年の上ノ原を考えながら、事務局を運営できればと思います。

2024年度も、ご協力をお願い致します!

■セミナー

小幡 和男(茨城県霞ヶ浦環境科学センター) 「上ノ原にて考えたこと」 報告 稲貴夫

小幡和男さんは、藤原で第九回全国草原サミット・シンポジウムが開かれた2012年10月に、初めて上ノ原を訪れました。これが縁で、翌年5月の野焼きにも参加されたのですが、この時は生憎の事情で野焼きは中止になってしまいました。そこで急遽、上ノ原や古道の散策を実施したのですが、ここで小幡さんに臨時的「植物講座」を開講いただいたことで、参加者は野焼きの代わりに、十分に藤原の自然を堪能することができました。



小幡さんは、その後も引き続き上ノ原の野焼きに参加され、今年度の重点課題である上ノ原の植生調査では、指導的立場を担っていただいています。

総会後のセミナーでは、青水と深い御縁のある小幡さんより、「上ノ原にて考えたこと」をテーマに講演を頂きました。学術的な内容を、写真や図表を使って丁寧に解説いただきましたが、その概要は以下の通りです。

○上ノ原の植生学的な位置づけについて

上ノ原は、日本海要素と太平洋要素が交わる移行部に位置する山地の夏緑樹林帯であるが、日本海側に近く雪が多いため樹高の高い針葉樹は少なく、「偽高山帯」にあたる。ブナの分布でみても、日本海側のブナと太平洋側のブナの境界線から日本海側寄りに位置している。他の植物分布と比較しても、多雪環境に適応しており、7対3くらいの比率で日本海側の要素が優っている。

○草原と植生遷移について

植生遷移には、火山の噴火等でできた土壌のない裸地からスタートする一次遷移と、森林伐採等による土壌のある裸地から再スタートする二次遷移とがある。よく見られる遷移の模式図の中には、この一次遷移と二次遷移が混在しているものがあり、注意が必要だ。

茅場として利用されている上ノ原のような草原は、採草や野焼きで森林への遷移が進まないようにコントロールされた植生である。日本の草原の面積は、劇的に変化してきた。1900年代は、国土の1割が草原であったが、1980年代には1パーセントにまで減少した。これは、人間が草原を必要としなくなった結果と言える。

これが日本の草原の特徴であるが、世界に目を転じると、少し異なる情景が見えてくる。温帯草原のステップや熱帯草原のサバンナには、疎らに樹木が生育し

ている。そして、草地のない砂漠に木が生育することがある。これは、気候によって単純に決まるのではなく、遊牧などによる家畜の影響や、野生動物などの影響が大きいと考えられる。アフリカのサバンナにあるモパーニ林は、アフリカゾウの食害によって低木状となっている。

○霞ヶ浦の茅場について

最後に、茨城県の霞ヶ浦に生育するカモノハシ(シマガヤ)の話をしたい。穂の形が鴨の嘴に似ているのでこの名があるが、霞ヶ浦の妙岐ノ鼻は良質の茅であるシマガヤの産地であった。しかし、水門ができて霞ヶ浦の水位が高くなり、シマガヤよりもヨシが優占するようになって、シマガヤは準絶滅危惧となった。

また、カドハリイというカヤツリグサ科の植物は、日本では妙岐ノ鼻にしか生育しておらず、絶滅危惧IA類となっている。この他、妙岐ノ鼻のある霞ヶ浦西岸には、北方系植物の分布が見られる。特異な環境の中で遺存種として残されてきたものと思われる。

○おわりに

草原と言っても、視点を広げるとその生態的な位置づけは多様である。そうした観点を大切にして、これからも上ノ原について調査を進め、考察を深めてゆきたい。

■2023定例活動⑧「雪原トレッキングと自然体験」-雪降る中、今年も氷筈が我々をお出迎え- 報告 草野 洋・稲 貴夫

2023年度最後のプログラム、雪原トレッキングを3月9、10日の両日、会員、会友16名の参加のもとに実施しました

『茅風』71号掲載の「藤原だより」の通り、今年は異常に雪が少ないのですが、3月に入ると一転して雪の日が続き、プログラムは2日間とも、雪が舞い散る中での活動でした。

1日目、上ノ原の入口まで車で着いた一行は、スノーシューやカンジキを履いて(写真・右)、「メイプル・ウォーター」の採取口



やはり今年は雪が少な



を取り付けておいたイタヤカエデの所まで歩き(写真・左)、タンクに溜まった樹液を採取しました。

カエデ類は、氷点下でも細胞が凍結しないよう、夏の間貯めたデンプンを糖分に変えて厳しい冬を乗り切りますが、雪解けの頃には春の芽吹きに備

えて、盛んに大地から水を吸い上げるために、細胞内の樹液を導管に流しだします。そのため、この時期に木に穴を開け採取口を挿し込んでおくと、微量の糖分が溶けた樹液が採取できます。これを40分の1ほどまで煮詰めたのがメイプルシロップです。

メイプル・ウォーターを採取したイタヤカエデ
今回は条件が悪いのか採取量は少しだけでしたが、「ゆるぶの森」の豊かな恵みの一端に触れることができました。

その後、藤原スキー場に移動して、この夜、五年振りに開催される「藤原雪まつり」の会場を彩る雪



左上
みんなでつくった
雪灯り
右上
会場入り口で出迎
える龍の雪像
左下
GOROPIKAの熱演

灯りを設置する作業をお手伝い。バケツに雪を詰めて、雪原にひっくり返してバケツをはがせば、雪の円錐台の出来上がり。そこにスコップで穴をあけてランプを置けば、立派な雪灯りの出来上がりです。その中でも、藤岡和子会員制作の龍の雪像は中々の力作。

その後、並木山荘に戻って夕食の後、雪まつりを見学するため再び藤原スキー場へ。久しぶりに「GOROPIKA」のファイアショーを堪能し、最後は雪原の夜空に打ち上がる大輪の花火を楽しみました。

二日目も天候は雪。車の屋根には、昨夜からの雪が積もっていました。

大幽洞を目指す雪原トレッキングには12名が参加しました。

宿からコースの入口まで車で移動し、スノーシューに履き替えた後、

大幽洞へは、ここからが本番です
(林道からの分岐点で記念撮影)



北山塾長をリーダーに、若手のメンバーが交代で新雪に覆われた雪原をラッセルしながら進みました。大幽洞を目指して、ゆっくりでも着実な歩みです。

出迎えてくれた氷筍は、今年は暖冬のためか幾分、細く小さめでしたが、洞窟の奥でキラキラ輝きながら青水の一行を歓迎してくれました(写真は参加者感想に掲載)。

帰路は、最初の急坂を滑り降りた後は、往路で踏み固めて来た道に戻ったので、歩みはスムーズ。無事に、往路2時間、復路1時間の雪原トレッキングを終えることができました。

一方、大幽洞トレッキングを棄権した残留組4人は藤原集落の雪の中の暮らしを見ようと師入、青木沢、湯の小屋の集落を尋ねました。いずれの集落も雪の中で眠ったように静まり返っていて、豪雪地帯の冬の暮らしの厳しさを実感しました。最後に湯の小屋温泉で凍れた身体を温めて宿に帰りました。



大幽洞まで最後の登りをラッセル



大幽洞までもうすぐ



雪の中の青木沢集落

■参加者感想

●幸田啓子

神秘なる洞…大幽洞窟トレッキングツアーへ参加させてくださり有り難うございました。

みなかみ町藤原の真白い山々に迎えられ、ワクワク&ドキドキ雪原にスノーシューを踏み入れた感覚は満ちるものでした！小雪の散るなか先頭の塾長が道無き道に道を造ってくれています。。。感謝！！

脚が滑り落ちそうになりながらも目的地到着。そして飛び込んできた光景に眼が踊りました！たっくさんの氷筍が誇らしげにツンツンしています！！

みなさまも是非とも体験してみてください！

森林塾青水 冬のイベント Wonderful
♡♡♡



氷筍が出迎えてくれた

●郡司典子

思わぬ大雪に見舞われ本当に雪原トレッキングできるのか不安と疑問渦巻きながらもスタッフの皆さんに助けられてカンジキに初挑戦しました。

簡単な構造のカンジキは靴に紐を括るだけで（とはいえ自分ではできずに締めていただく）、新雪の雪の登り坂を難なく上がることができました。

カンジキ凄い！なぜ歩けるの？と調べてみると雪に接する面積を広げることで浮力を上げて沈みにくくなり雪上歩行が可能になるのだという。マタギだったという宿の先代さんは現代より遥かに雪深い山でカンジキを駆使して猟をなさってことに思い馳せました。

新雪に時々つかかってバランスを崩しそうになりましたが、なんとかメープルシロップの採蜜ホースを取り付けたイタヤカエデまで辿り着くことができました。期待に胸を膨らませて根本を覗き込むと、積雪のせいでホースが外れ蜜がタンクに溜まっています。

楽しみにしていたメープルシロップ作りがなくなり帰り道は足取りも重くなりましたが、翌日のお昼時に以前採取したメープルシロップの原液（煮詰める前、イタヤカエデから滴り落ちたメープルシロップ風味水のようなもの）を飲む機会を得ました。

味わったことのない清々しさ、清涼な透明感ある喉越しと芳醇な香りとは感じる微かな甘みに思わず、甘露甘露と心の声が叫びました。甘露とは中国の古代伝承では、天地陰陽の気が調和すると天から降る甘い液体。インドでは飲むと不老不死になれるとも言われる甘い液体。

たった一杯のメープルシロップ原液ですが、冬季の冬の恵みは心身を浄め元気にしてくれました。

さらに雪降り積もった翌朝、いざ大幽洞窟へと。今回はスノーシューを付けて出発（今回も装着していただきました）。カンジキより操作が楽で歩きやすく、新雪を踏み分け踏みしめながら歩きました。

一度だけ先頭でラッセルしながら進みましたが、雪は重くバランスを崩しそうになりました。踏み跡のない道の行先を確かめながら先頭を交代して少しずつ進みました。

斜面に出たからは若手の2人が元気にラッセルしてくださったので、その後を無我夢中で進みました。いつ終わるの？終点はどこ？とキツくなった斜面で立ち止まると氷柱と氷の壁が見えました。すぐそこがゴールだと残る力を振り絞って急斜面を這え上がりました。

洞窟を覗くとキラキラ透明な小さな瓶がたくさん立っているように見えたのが氷筍？！でした。写真で見るとよりずっと美しく、小さなガラスの瓶に命が宿って生きてるように見えました。疲労困憊の心身が一気に元気になりスマホでたくさん写真をとりました。

でも真実の姿を捉えることはできません。本当に美しいものはそこにあるからこそ美しいのです。毎年姿が変わるといふ氷筍を見るために毎年参加している方の気持ちが分かりました。

氷筍から力を頂いて元気に降りて無事宿に到着しました。お昼ご飯のカレーライスが美味しいと感じてお代わりもしました。そこでメープル樹液原液をいただき、その美味しさに目が丸くなりました。



森林と土地がもたらす美しく豊かな恵みに手を合わせて感謝しました。

守っていくものと私たちが守られていることは同じ場、同じ時にある。コモンズ村ふじわらは草木国土仏を超えた営みが繰り返される美しい命溢れる村です。雪原トレッキングを通して思ったことです。

■2024定例活動①「野焼き」 -これまでの鬱憤を晴らすような大規模で迫力ある野焼き- 報告 草野 洋、藤岡 和子、尾島キヨ子、稲貴夫

森林塾青水の野焼きは従来から4月末に行われてきました。かつては残雪の白、炎の赤・オレンジ・黄色、灰色の煙、未黒野（すぐろの）黒が見られる雪国の遅い春の風物詩でした。

ところが年々積雪量が少なくなり、周りに残雪のない野焼きとなっている。ここ最近では、2023年は野焼き講習会のみで本番は降雨のため中止、2022年は前日の雨（みぞれ）で野焼きはできたものの欲求不満の野焼き、2020、2021年はコロナ感染拡大で中止を余儀なくされ、やっと4月27日、28日に好天に恵まれ4年ぶりの本格的な野焼きを行うことができました。（以上：草野）

コロナ禍による3年間の中断を挟み、2年前から再開した上ノ原での野焼きですが、一昨年は野焼き当日は晴の予想でしたが、前日からの雨の影響が心配されました。そこで、地面に張り付いた茅をレーキで毛羽立てるなど、少しでも燃えやすくする対策を施して火を入れましたが、野焼きの効果については、あまり期待できない結果となりました。また昨年は、野焼き当日は雨が予想されたため、一日目に「野焼き講習会」として実施しましたが、やはり本番は雨で、計画していた茅場の野焼きは叶いませんでした。

最近、茅の生育が雑草に負けている箇所がみられることもあり、本来の効果が期待できる野焼きの実施が、青水にとっての課題になっていました。そんな中、運を天に任せつつも、野焼きの予備日を設けた上で、事前準備にも万全を期して臨んだのが、今年の野焼きです。

○前日(26日)と一日目(27日) 本番に向けた準備

まず、藤岡和子、松澤、稲の幹事3名が、26日に上ノ原に前乗りし、午後から6ブロックに分かれた今回の火入れ予定地の周囲を刈払う作業に従事しました。予定地は、十郎太沢の東側で、茅場全体の約三分の二にわたり、また茅が寝ているため、3人での作業量には限界がありますが、明日の作業がスムーズに行われることを念頭に、防火帯となる箇所を刈払い機で刈っていきました。

そして迎えた一日目の朝、3人の他に自伐林業を営む島袋さん、昨夜から途中車で仮泊して駆けつけた藤岡貴嗣新幹事も加わり、北山塾長以下6人でテントの設営や道具類の運搬など、参加者を迎える準備に取り掛かりました。

今回の参加者は、一日目33名、二日目40名。昼前から参加者が集まり始め、それぞれ受付、昼食を済ませたあと、最初に山の口開け神事を十二様の前で行いました。北山塾長が明日の野焼きをはじめ、



山の口開け神事



阿部みなかみ町長の挨拶



レーキで可燃物を寄せる

一年間の作業の安全を祈って祝詞を奏上したあと、全員でお参りし、お供えしたお神酒を頂きました。

続いての始まりの式では、北山塾長に続いて、来賓のみなかみ町の阿部賢一町長が挨拶、青水の活動への期待の言葉が寄せられました。

続くオリエンテーションでは、今回の野焼きエリアと防火帯整備について説明があり、早速参加者は、手にレーキや熊手を持って、作業に従事しました。(写真・左)

3時に作業を切り上げ、クロモジ茶で喉を癒やしたあと、野焼き講習会を実施しました。これは、明日の本番に備えて、野焼きが初め

ての参加者にも、野焼きの手順やジェットシューターの使い方などを体験してもらうためのもので、広場の北側のエリアで行いました。

野焼きの熟練者である小幡和男新会員が、火入れのポイントや道具の使い方などを解説、続いて、消

火用の水タンクを積んだ軽トラとジェットシューター一隊が配置に着いた後、バーナーで点火していきました(写真・右)。講習会は特に問題なく終了。全員、明日の本番に期待を抱いて、一日目の上ノ原での作業を終えました。

また、この日は視察のために上ノ原を訪れていた(公財)社会貢献支援財団の黒川さんにも、初めての野焼きを体験頂くことが出来ました。(以上:稲)



○本番前夜～車座講座余話

発足20年節目の野焼き本番前夜、宿の吉野屋での車座講座は、筑波大学大学院修士課程をこの3月に修了された飛詰峻氏の研究課題『茨城県つくば市の茅場におけるススキの

現在量および質に関する研究』の発表です(写真・右)。飛詰氏と青水の出会いは、2021年9月に行われた草原サミットで縁ができた和歌山大学の学生によるプロジェクト『むすび屋弥右エ門の茅草き』のススキの茅刈り指導として声がかかったことがきっかけです。この年の12月、青水有志6人が生石高原の茅刈りに出向いた時のプロジェクトメンバーの一人でした。このプロジェクトに関わったことで、茅についてもっと知りたくなった飛詰氏は、翌年、和歌山大学を卒業後、筑波大学でススキ茅について研究を始めます。小貝川の野焼きで、流域連携している小幡和男氏(今年の野焼き指揮官)と筑波大学は、深い関係があるようで、近年同大学研究者が度々上ノ原を訪れています。そしてまた、2021年の茅の嫁入り先『小さな地球ゆうぎつか茅草き』で出会い、一昨年



の野焼き茅刈りと参加してくれている東工大学の学生とも飛詰氏は、繋がっていたのです。

この夜、いろいろな視点から茅を研究する学生が、複数大学から偶然集いましたが、彼らは、茅を介してすでに仲間になっていたことが、この車座講座に加えて嬉しかったことです。どうやらここでの話から、学校を超えた何かが始まりそうです。大変盛り上がった車座口座に懇親会。草原ネットワークは、人のネットワークでもあるのだと感じた夜です。(以上:草野)

○野焼き本番 尾島キヨ子・藤岡和子幹事より

4/28

・前々日と前日に4~5m巾の防火帯を作り、茅場全体の2/3程を6区画に区切る。

・司令は菅生沼などで野焼き経験豊富な小幡先生と北山塾長。ガスバーナーを持つ着火隊、ジェット・シューターを背負った消火隊が揃う。勿論、みなかみ町藤原地区消防第4分団の消防ポンプ車と消防隊員も

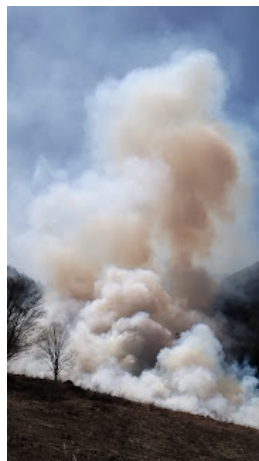
・焼くのは1区画ずつ、着火の基本は風下から、斜面上から。そこから区画の縁に沿って、9時過ぎに火入れスタート、火は徐々に燃え進み区画の中心に向かう、

・私はまだ残りの防火帯を作っていて、斜面上部から一番遠くに煙が昇るのを見る。順調に進み、今までで最大の面積であるのに焼け残りなし。

・私が関わり始めた十数年前は雪が残っていて、重機で雪をどかしてから雪間を焼いた。だから防火帯は不要だったが、雪の下だった茅は焼け残りもあった。(報告:尾島)



上・中左
防火帯整備
中右
煙の色から乾燥具合がわかる
下 野焼き本番
右下 残り火



🔥野焼き～上ノ原入会地～🔥

野焼きは、草原維持の大切な里山生業のひとつ。戦後、高度成長とともに、衰退してきた入会地の里山文化と、生物多様性を取り戻し、次世代に繋いでいくには・・・。

『飲水思源=ゴクンと飲んだその水の源に思いを馳せる』森林塾青水の活動に加わって早10年。ここまで、私が続けてこれたのは、『ご縁』と茅刈り仕事を知ったから。今亡き長老に習った10年前、ザッザと鎌鳴る長老の腰つきがかっこよくて、長老みたいに刈りたくて。それから毎年刈っているけど、長老には、まだまだ遠く、悔しくて、でも楽しいし、しつこく食らいついているだけなんだけど・・・。

実は、5年ほどほぼ焼けてない。

2020年、21年新型コロナウイルスのパンデミックで中止。翌年、前日の豪雨の影響で、まだら焼き。昨年は、本番日がどしゃ降り中止。無念の連続。昨秋の茅刈りでは、茅刈り職人萬枝さんもぼやくほど、ススキ以外の草が増えていました。取り返せるか!!

上ノ原野焼きは、草原約12haを3分割し、1年1区画、3年で1周りで、焼いています。今年は、2年分の約8haを焼き払う計画を立てました。

4/26

私を含む3人が、事前準備防火帯草刈りのため現地入り。焼かずに積もった枯れ草、雪国ならではの倒れた草、侵入木の低灌木、夏の草刈りと違い至難の技。汗だくです。翌朝も朝からブン回しましたが、2年分の防火帯をみんなが集まる前までに、刈り切ることはできませんでした。

4/27 午後1時

入会地の仕事始め。十二様にご挨拶。塾長の祝詞が草原に渡り、山の口開け神事を恙無く執り行いました。

そして、野焼きの準備に戻ります。残りの防火帯草刈りの他、刈り草を燃焼帯に入れ込む作業を行います。山火事や、大事故に繋がらないようにするための大切な仕事。あらかた終えたところで、練習を兼ねて小規模焼きました。(報告:藤岡①)



4/28

野焼き本番。快晴です。地元消防団も到着し、火点け役4人、ジェットシューター10人、レーキ約20人で役割分担。野焼きの指揮は、流域連携活動で交流のある茨城の小幡さんをお願いしました。約8haを6ブロックに分けて縞焼き開始。私は、火点け役の一人、夫は、ジェットシューターの一人として働きます。

数本の枯れ草に火を点ける

瞬く間に炎が走る

風を生み

炎と煙が時と場を譲りながらも共鳴する

ともに舞う

小幡さんの匠なちょっとした焼き技が光り、野焼きという広大な生業を成功に導いていく鍵となる過程を、火点け人として間近で感じられたこと。それはそれは、特別な時間でした。点から線となり面となる炎。熱風が肌を刺す。炎は、風を生み、生まれた風が炎を押し、立ち込める煙は、上昇気流にのり、天に昇る。炎もさることながら、煙も、末黒野も圧巻の景色を創りだすのです。今、待ったなしの地球。急速な気候変動にどう立ち向かうか。質の良い茅の供給へ。生物多様な草原・薪炭林へ。再始動です。（報告：藤岡②）

今年の野焼きは、これまでの鬱憤を晴らすかのように、3ブロックローテーションの2倍と規模も大きく、よく燃えてました。しかし、反省点もあります。

前準備が必須ということです。幹事3名が前々日入りしましたが、恒久防火帯の刈り払いを終わらせることが出来ず、かなりの重労働だったようです。参加者が到着してからの仮設防火帯（区画防火帯）は前日だけでは終わらず当日に持ち越しました。また、刈り払いの程度に疑問のあるところもありました。幸いに風も弱く、消防団の事前水まきや水タンクの設置でジェットシューターの水の補充も手際よく行われたので延焼などは起きませんでした。従来と違う場合は、事前に周知して前々日入りの人数を増やすなど規模なりの準備に万全を期すことが大事だと感じました。また、一部立木の枯れ枝に火が移りくすぶるところがあったので区画終了後の見回り隊の必要性を感じました。（報告：草野）

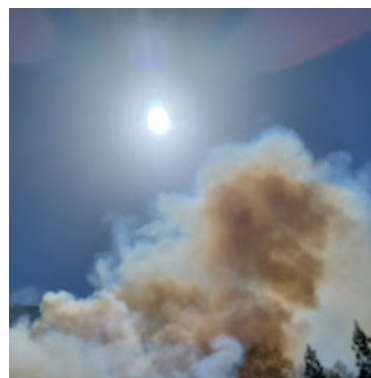
写真解説 左から右へ

野焼き前の上ノ原 縞焼き法による野焼き

消防団も出動 火が消えて末黒野に

背中のジェットシューターは延焼させない決意

右下のドローン映像二枚は東工大塚本研究室提供



麗澤中学校樹木観察会 ～五感を使って自然を楽しむ～ 報告 西村大志

5月25日、毎年恒例となっている麗澤中学校1年生の樹木観察会を行いました。当日は天気にも恵まれ、164人の生徒と11人の先生、13人のインストラクターが参加しました。

麗澤中学校は緑に溢れた広々とした敷地があり、周辺の麗澤学園と合わせて、約300種、1.5万本の樹木が生育していると言われています。環境的にも、園地のように整備された場所や、自然の森の様子をある程度残した場所など様々です。この環境は自然体験の「入門編」にぴったりなので、秋のみなかみFWの事前学習の意味も込めて、樹木観察会を行っています。

この観察会では樹木や自然に関する知識よりも、「五感を使って自分自身で感じ、気づくこと」を大切にしています。プログラムの最初のウォーミングアップでは、広場に集まって大木を観察しながら



五感を使って感じ、表現してもらいます。地面に寝転んだ時の風や日差し感覚、体を使って測ってみた木の高さや太さの実感、樹皮や地面の感触、そこに行き来する虫たちの発見・・・今年も生徒たちの様々な気づきに触れることができました。

そのあとは15人～20人くらいの生徒のグループと青水のインストラクターと先生で構内のルートを歩き回り、要所要所で観察や体験を行います。種の飛び方や実の付き方、ふかふかの土のでき方や役割、生活の中での樹木の使われ方など、実際に観察・体験しながら学んでもらいます。その中でも今年も一番反響があったのは、ニッケイの葉っぱの体験でした。



を感じるので、生徒たちの最も多かった感想は「バジルの香り」でした。この感性は経験によるものか世代によるものか、どちらなのでしょう。笑。

ともかく、そんな感じでこちらが想定していないような反応が返ってくることもあり、それがまさにこの観察会の醍醐味かなと思います。

観察の後は広場で種の模型を作って飛ばし、最後に教室に戻ってまとめと発表をしてもらいます。コロナ禍を経たからか、以前に比べて終盤になると疲れている生徒が多いように感じましたが、ケガなどはなく無事に観察会を終えられました。10月のみなかみFWでもたくさん楽しんで多くのものを学んでもらえたらと思います。

五感で植物観察レポート

藤岡 和子

はい！この木を五感で感じてみよう！

グループのシンボルツリーに到着するなり、葉っぱを採って嗅いでいる。「うーん？」揉んでごらんとアドバイス。

「わあ！サクラの香り～」

「いい匂い」

「食べていいですか～？」

噛って ペっぺ 美味しい ごっくん

その様子を見て交雑したエドヒガンザクラだと伝える。シンボルツリーは、遊歩道まで根を張り、タイヤを押し上げ、ぼこぼこしている。幹から大分離れた根っこの証拠。「えー！ここもサクラですか～！」

園路から外れた学校の裏手へ。そこは、朝、私が見つけたとっておきの教材。伐根された大木の下部が3つ転がっている場所。固い木質の一部がパフパフのスポンジ状になっている。触って感じる箇の力。株の内部は空洞に。目で見ると虫の力。株の裏にまわる。直根、髭根、根っこと根っこの間に石が挟まって。取れな～い！根っこの力。

【フカフカの土壌】ヒノキ、スギ、サワラ、ツバキ、サカキ、ネズミモチ、ユズリハ、アオキ、ヤツデ、ハラン、リュウノヒゲ.....。常緑の林の中へ。

カラカラ枯れ葉のパリパリパリ

カラカラ枯れ枝ポキポキポキ

一歩入った瞬間から分解のリズム、さあ！枝を拾って土に刺してみよう！「あれ？先生みたいに刺さない？こっちに刺してみよう！」僕は場所を変えて再チャレンジ「うわあ！！こんなに刺さったよ。」何か気づいた表情を浮かべた僕「ここはさっきより微生物が沢山いるってことかあ。」目を輝かせて叫ぶ僕。土壌動物が通る孔は、土の中の空気の通り道になる。空気が土壌に入ると、微生物が活発になり、有機物の分解が速くなる。

【学校の樹木から思い出す】さあ校内を五感でどんどん知っていきよう！アジサイは、葉が虫に喰われて葉脈しか残っていない。どうして？ナツツバキの蕾は、銀色ベルベットの宝石、年輪で何で出きるのかな？樹皮って大切？要らない？歩けば歩くほど、

見て、嗅いで、聴いて、触って、味わって、五感を使えば使うほど、なんで？なんで？ 学校はなんでだらけだ。

トイレ休憩中の女子トークを盗み聞き。「小さい頃、公園に赤い実がなる木があって、友達と食べてみたら甘くて、おいしかったから全部食べちゃたらさ、次の年、無くなっちゃったんだよね。全部食べちゃったからかな？」みんなちがってみんないい。譲り合いの話をした直後の会話。頬がゆるむ。

2時間の植物観察も終わりに近づく。今日どうだった？聞いてみる。「楽しかったー」「すごく楽しかったー」「楽しかったです。」18人みんないい顔で答える。

いつもの授業の3倍の時間。よく集中力落ちなかったなあ。リアル学びの大切さを実感する。教える側からの一方通行の学びでなく、問いかけて一緒に考えて、新しい『なんだろう？』が生まれて、また考える。木の根っこで、箇の力、どこから分解されているのかに触れた。年輪を見て、どうして出さるのかを考える。中が空洞なのに実をつけるオオバボダイジュを見て、樹皮の大切さを知った。イヌシデの若い種を2つで飛ばすか、1つで飛ばすか比べてみる。2つの方が鳥みたいだけど……。答えは自分で、これから学び取っていこう。まだ若い知識の種をマンリョウのように熟していこう。今日の楽しいがきっと原動力になる。今日の子どもたちに次会えるのは10月 群馬県みなかみ町上ノ原入会地 今から楽しみ。



写真説明 左から
 ・根っこの観察
 ・虫を発見
 ・木材腐朽菌のキノコ
 ・自作のイラストでクイズ
 ・オオバボダイジュの花
 ・記憶に残ることをメモ(記録)



生育する場所の違いを説明するイラスト

■ 藤原だより
 「みなかみ町 ネイチャーポジティブ宣言」
 塾長 北山 郁人

みなかみ町は、6月14日にみなかみユネスコエコパーク登録7周年に合わせて、ネイチャーポジティブ宣言をおこないました。

ネイチャーポジティブとは、人と地球のために生物の多様性の損失をくい止め、自然を回復させることを言います。みなかみ町には上ノ原のススキ草原をはじめ、谷川岳や赤谷の森などイヌワシや希少な動植物が多く生息しています。みなかみ町はそういった自然と共生するまちづくりに長年取り組み、2017年6月にユネスコエコパークにも登録されました。これまでの取り組みをさらに推進し、ネイチャーポジティブの実現をめざします。



ネイチャーポジティブ宣言の3つの柱

まもる
 みなかみユネスコエコパークにおける自然環境・生物多様性の保護・保全の取り組みを推進し、人と自然が共生する持続可能な未来の実現を目指します。

いかす
 生物多様性の保全回復とともに、みなかみユネスコエコパークの自然を活かしながら、地域振興や産業・教育・福祉の振興、防災等に取り組みます。

ひろめる
 自然に触れ合う豊かな体験を提供するとともに、地域の魅力を広く発信していきます。また、ネイチャーポジティブの実現に向けて、企業・団体等との深い連携を推進していきます。

「こもんずの広場」第3回
 ー第14回：全国草原サミット・シンポジウム
 in おたりへのお誘いー

ありや、もう3回目の「こもんずの広場」のメ切だ!! と慌ててみても始まらない。いろいろな方に面白いお店を出していただく、と見得を切ったものの営業活動も全然出来ていない。こんこんと湧き出る泉のように毎回たのしいお話を綴られてきた清水さんの偉大さに改めて思い至ります。

無駄口はさておき、この秋10月下旬には青水恒例の茅刈りが予定されていますが、それに先立つ10月初旬に、長野県の小谷(おたり)村で「第14回全国草原サミット・シンポジウム in おたり」が開かれます。知る人ぞ知る、かもしれませんが、実は12年前の2012年に、第9回大会がみなかみ藤原で開かれたことを覚えている方はいらっしゃるでしょうか? 「～川でつながる草原の恵み～ 流域コモンズで分かち合う、水源地域の豊かな自然と暮らし」という副題のもと、全国から200人近くの人が上ノ原に集まり、一緒に茅刈り体験をしたり、藤原の集落や茅葺き建築を見学したりしながら、今は閉じられた藤原小中学校体育館をお借りしてシンポジウムや展示会を行いました。当時まだ小学生だった北山塾長の息子さんも全校生徒の一人として歓迎の合唱をしてくれたことが忘れられません。そう、このイベントは各地で草原の保全や活用を進める地域が持ち回りで開催し、全

第9回サミット(みなかみ)の様子



藤原小中学校生が歓迎あいさつ



茅刈り体験

りました。

「流域コモンズ」を合言葉にしたみなかみ大会では、最終日の「サミット」にも群馬県～茨城県の利根川流域から6人の首長が参加しました。この時閉会挨拶に立った清水塾長(当時)も、「草原サミットは閉会して終わり、ではなく次の開催が実現してバトンタッチしていくことが大事」と話されたことが記憶(記録)に残っています。

国の草原仲間や専門家、関係者に呼びかけてお互いの交流や情報発信を行う集いなのです。みなかみでも予算付けや全体の枠組みは町(行政)の肝煎りでしたが、実際に作り上げていったのは、町の担当者と地元藤原地区の皆さん、森林塾青水のメンバーなどの自発的かつ創意工夫にあふれる共同作業であり、り上がりま「もてなしの心」での交流会も大変盛り上がり

年月は過ぎ、回を重ねた全国サミット・シンポジウムですが、みなかみの次は熊本県阿蘇市(2014年)、その後兵庫県新温泉町(2016年)、宮崎県串間市・川南町(2018年)と西日本での開催が続き、久しぶりの東日本開催を心待ちにしていた静岡県東伊豆町(2021年)の大会はなんとコロナ禍に巻き込まれ、当初の計画が一年延期された上に「リモート開催」となり、残念ながら皆で現地を訪れることは叶いませんでした。

そういう意味でも東日本でのリアル開催は実に12年ぶりです。小谷村は長野県の北端、新潟県境に接し、国際観光地としても脚光を浴びている白馬村のすぐ隣です。北アルプス最北部の峰々に抱かれ、地域の方々が守り続ける茅場は、梅池高原スキー場、白馬乗鞍温泉スキー場などに囲まれる場所にあつて、何か上ノ原の風景にも似た雰囲気を感じます。今年「草原の里100選」にも仲間入りした「小谷」の茅場は、上ノ原とほぼ同じ標高1000m前後の場所に残され、春の野焼きから秋の茅刈りまでの年間作業も似通っていますが、上ノ原のススキに対して小谷では「コガヤ」と呼ばれるカリヤスが優勢であること、茅束を5把集めて1ボッチとする上ノ原に対して小谷では6把ずつ組んで「タテ(茅立て)」と呼ぶことなど、微妙に違う地域性があるのも興味深い!!

また小谷村にはTVでも紹介されたことのある茅葺き師・松澤さんが営む(株)小谷屋根があり、シンポジウムや現地見学会での発表や実演も見られるとのこと。プログラムを見ただけでもワクワクする内容が満載ですが、実際に現地を訪れ、みなかみ(上ノ原)の自然や人々の営み、草原管理の楽しみや苦勞などと対比しながら、学び合えることが楽しみです。百聞一見にしかず、我と思わん方は「小谷(おたり)で会いましょう!!」(笹)

参考:全国草原サミット・シンポジウム in おたりホームページ
<https://www.sougen-summit.com/> (参加申込もここから)

※「こもんずの広場」出店希望者(話題提供者)は随時募集中です!! 笹岡に直接耳打ち又は編集部まで(出店料はいただきませんが、原稿料も出ません)



小谷村サミット・シンポジウムの案内

編集後記

遅くなりましたが、『茅風通信72号』をお届けします。4月13日の総会で、本年度の事業計画などが定まり、役員構成も新しくなりました。長年、上ノ原での活動を幹事として盛り上げていただいた岡田伊佐子さんに、心から感謝申し上げます。引き続きのご指導をよろしくお願い致します。新年度最初の活動である野焼きは、久しぶりに予定区域全てを焼き払うことが出来ました。これから毎月、上ノ原での活動がありますが、例年以上に茅の成長が気になる年になりそうです。秋の茅刈りでは気持ち良い汗をかきながら、上ノ原に立派な茅ボッチがいっぱい出来ることを期待しつつ。(貴)